

いた史実を日記などから明らかにし、「総入れ歯のルーツは日本」と題して記載している。その他、粹な江戸っ子の歯磨き、塩から磨き砂へ、「忠臣蔵」歯磨塩の騒動などからすさまじいお江戸の歯磨粉商戦、そして西洋式歯磨きの伝来などにふれている。また、著者のライフワークである「歯吹如来像の謎」など著者の優れた史観によるわかりやすい解説は類書にみることのできない名著であり、良書であるといえる。

著者は現在東京歯科大学名誉教授でありながらも今も火曜日は付属病院で、月・水・金は自宅で「子息とともに歯科診療に従事するかたわら、日本歯科医史学会監事、The American Academy of the History of Dentistry 会員のほか国際歯科学会（ICD）国際理事で、国際人であるとともに、歯科医史学の重鎮である。著書には「むしばのたはごと上下」（書林）、「歯は生命・噛む」（求龍堂）、「頭のよくなる歯の噛み合せ」（新星出版）、「歯科の歴史、おもしろ読本」（クインテッセンス）などの名著がある。本書は歯に関する東西の風俗をもとに古き歴史の認識を基盤として「歯の字の話」、そして「近代歯科医学の先覚者」で結び、近代歯科医学史の真髄に触れている。本書は今まで知らなかった歯の風俗誌を見、それから歯の風俗史を知る最高の喜びと楽しみを味わせてくれる数少ない良書であり、加えてこれまで気づかれることのなかった温故知新から新しい歯科医学の方向を示しうる名著といえる。

「私は歴史家でもない。風俗史や民俗史を専攻したものである。まして世間という考証家でもない。しかし、自分の職

業を通じて歯というものが昔から人とのような関わりあいがあるのか、現在に至るまでの軌跡を述べ、皆様に歯に対する関心を持っていただきたいと願って本書を書いた」と著者はいう。この「あとがき」に乾杯！

そして良薬は口に苦しといわれるように、得てしてこの種の良書は面白くないのが定説である。著者は「寝転んで、あるいは電車の中で、また、待ち合わせの合間に気軽に読みただければ幸いと思う」と結んでいるが、本書はまさに、そのような本で、一般の人々にもおすすしたい良書である。

（谷津 三雄）

〔时空出版・東京都文京区小石川四一八一三、電話〇三―三八一―五三三三、一九九三年一月三〇日発行、B6判、全一九五ページ、定価一六〇〇円〕

「京都府立『癲狂院』の設立とその経緯」（三十九巻四号）の著者から訂正希望の申し入れがあり、検討の結果これを掲載することとした。

編集委員会

〈訂正〉

「依刹毘埵児」は「鬱憂」ではなく今日という心気症と考えられる。また「自尊狂、酒癖」は当時の英国流診断法にも、

また独逸国流診断法にもみられるものではない」という記述をしたが、当時これらの疾患自体に関してすでに報告があったことが明らかになった。以上の理由により、二九頁一二行目「精神病約説」より同頁一五行目「不明である。」までの文章を削除する。以上の訂正について、貴重な御指摘および一次資料の御教示をいただいた岡田靖雄先生に深謝いたします。

また『京都府史・第二篇政治部衛生類第六』に収録される「癲狂院一件」により、南禅寺方丈の借り受けの経過について、より詳細な内容が明らかになったので、二二頁二三行目「南禅寺方丈を借り受け、まわりの空き地を花園の遊歩道にするよう、貫属課に命じたのである。」を「南禅寺方丈の仮借を貫属課に命じたのである。また医務掛はまわりの空き地を、花園や遊歩道にするために用いたいと願っている」に訂正する。

その他の訂正

二〇頁四行 神業 ↓ 神崇

二四頁一八行 軽走 ↓ 散歩

二六頁九行 カルキュラム ↓ カリキュラム

二八頁七行 医療治法 ↓ 医薬治法

(小野 尚香)